



撮影:西山芳一(表紙、並びに当ページ)

黒部ダム

栃木県日光市

今から遡ること百年余り、一九一二(大正元)年に栃木県利根川水系鬼怒川と土呂部川の合流点に築造された黒部ダム。発電用としては日本初の重力式コンクリートダムだ。黒部ダムと言えば富山県のそれを想起するが、竣工はこちらの方が半世紀ほど早い。明治期の日清、日露戦争に勝利した日本は経済発展の波に乗り電力需要が急速に高まっていた。その対応策として鬼怒川流域にも多くのダム、発電施設が整備される。この黒部ダムも東京をはじめとする都市部の電源として重要な役割を果たしている。

築造に当たっては資器材の運搬に供する馬車鉄道や鉄柵が整備された。当初は竣工後に閉塞される予定だったこのルートは、後に蒸気鉄道、電気鉄道の軌条として再整備され、東武日光線と接続されることになる。ダムから下流の下滝発電所(現・鬼怒川発電所)まで導水する水道管が敷設されたことから鬼怒川の水量は劇的に下がり、結果として多くの源泉が発見され鬼怒川温泉の隆盛も促した。

堤高約三〇㍎、堤頂長約一五〇㍎、アーチ状の平面部から連なる越流部に一五㍎もの長い水平部を有する構造が大きな特徴になっている。堤体は河床の玉石を用いた粗石コンクリート

で、表面には石材を人力により畳積みにした張石工が施された。豊満な局面を見せる堤体とその上にそびえるように載る鋼製ローラーゲートのメカニカルな意匠のギャップが独特な景観を生み出している。上流側から眺めるとゲートがダム湖の水面に映え、あたかも水上に屹立する城門のような趣があった。黒部ダムは一九八七(昭和六十二)年に大規模な改良工事が実施され、かつて二門あった洪水吐は八門に、堤高も六㍎ほど低くなった。しかし、国定公園内の豊潤な自然環境にあって往時の土木技術の粋を伝えるべく堤体を覆う石張りを再現し、荘厳な雄姿が維持されたという。黒部ダムは二〇一八(平成三十)年に土木学会選奨土木遺産に認定されている。



堤体積は77,822m³で昭和の大改修により少しスリムになった。それでも下流に向けて孕むようにせり出す堤体の存在感は圧倒的だ。その表面には繊細に石張りがなされ有機的な局面を伝って静々と湖水が流れていた。送水管の改修のため余剰水を放流しているのだという。東京電力リニューアブルパワー(株)による丁寧な補修を施されながら百年を経て黒部ダムは今なおその使命を果たし続けている。